

2022 国民体育大会（栃木）視察レポート

報告者：澤野 建太（富士市立高等学校）

① 大会名 いちご一会とちぎ国体（第77回国民体育大会）

② 日程 10月3日(月)～10月4日(火)

③ 静岡チーム分析

<試合結果> 一回戦敗退

静岡 2 - 3 新潟

(0 - 2)

<試合内容>

新潟は試合開始と同時に、前線からのハイプレスをかけてきた。静岡は GK からショートパス主体のビルドアップを試みたが、前半4分に自陣でボールを失い、ショートカウンターで失点した。その後も相手の前線からのプレスを攻略できずに時間が経過していった。前半26分にルーズボールが相手ボールとなり、カウンターで失点した。前半には、静岡にも決定機が3～4回程度あったが、決めることができずに前半が終了した。後半に入り、静岡は2トップに変更し、スピードのある選手を前線に投入した。しかし、噛み合うまでに時間がかかり、停滞する時間が続いた。すると、後半25分にペナ付近でのチェックが甘くなったところからシュートを打たれた。シュートはディフェンスにあたり、コースが変わり3点目を奪われた。その後、後半から投入したFWがDFの背後をとり1点を返した。アディショナルタイムにも直接フリーキックを決めて1点差と迫ったが、そのままタイムアップとなった。

<静岡チームへの提言>

(1) ショートパスを主体にビルドアップしていこうという意図は見えた。しかし、相手のプレスが噛み合ってしまった為、もう少しロングボールを使い、相手の背後をシンプルに狙ってみても良かったように感じる。また、パスが緩くなり奪われるシーンは目立った。実際にボランチのところでもかなりボールロストが多くピンチを招いていた。たればだが、そうすれば相手のラインが下がり、ライン間が広がり、静岡のやりたいスタイルをもう少し表現できたのではないかと感じた。実際に得点した場面や、前半の決定機はシンプルに相手の背後をとったものであった。「ゴールを奪う」ためにまずどこを選択（観る）するのか、という意識はやはり重要であると再確認した。原理原則の部分があつてこそ、自分達のスタイルがさらに生きてくるのではないか。

(2) 相手のプレスは確かに早く厳しくきたが、それでもいなせる技術を磨くことも必要だと感じた。もう少しダイレクトパスを増やすことや、トラップで動かすことなどの工夫も必要である。それに加え、どこでボールを受けるのか、どういう身体の向きでボールをもらいにいくのか、そうしたプレーを常に考えてプレーすることが求められる。

(3) 2失点目の始まりはルーズボールを新潟のFWと静岡のCBが競り合い、それが新潟ボールになったところからはじまった。また、3失点目も、1stDFがはっきりせず中に侵入され、シュートブロックが間に合わず、足にあたりコースが変わった。それ以外の場面でも、この試合は全体的に球際で新潟が勝っている印象がある。その1つ1つがもし勝てていたら試合の流れにも大きく影響したのではないか。 国体視察レポート

④ 国体の他試合を視察して

<チーム構成> 京都 vs 北海道、福岡 vs 青森、新潟 vs 北海道、東京 vs 神奈川の4試合を視察した。新潟は帝京長岡、青森は青森山田、京都は京都サンガ・京都橘、北海道はコンサドーレ・札幌大谷、のように単独もしくは少数のチームで構成されたチームや、静岡や福岡、東京、神奈川のように多数のチームから構成されているチームなど様々であった。

<京都 VS 北海道 >

京都 0 - 1 北海道

北海道はロングカウンター、京都はシンプルに前線にボールをつけ、前線3人（京都橘）のドリブルでチャンスを作るという構図となった。京都が押し込む時間が長かったが、後半にコーナーキックからのカウンターで北海道が先制し、そのまま試合終了となった。北海道は前線に足の速い選手と、体の強い選手で2トップを置き、ほとんどがその選手目がけてのロングボールでの攻撃となっていた。北海道は自陣にブロックを形成し、京都はサイドからクロスという形が多くみられた。

<青森 vs 福岡>

青森 1 - 1 福岡 PK 青森勝利

青森は基本的にはペナ角にロングボールを入れ、前線からの激しいプレスでショートカウンターを行っていた。全員青森山田高校ということもあり、特有のロングスローも多く見られた。前半から、ハーフウェーライン付近からのロングスローを多用していた。福岡は相手が前から来ればシンプルに裏、繋げそうであればCB、ボランチにつけてビルドアップし、その後サイドバックの裏を狙う場面が多く見られた。互いに1stDFが素早くプレスをかけ、後ろも連動した守備を行っていたため、とても強度の高い試合となっていた。青森はコーナーキックからの得点。福岡はカウンターからの得点となった。

<北海道 vs 新潟>

北海道 1 - 1 新潟 PK 北海道勝利

北海道、新潟ともに前の試合と同様のスタイルでの試合運びとなった。新潟が前線からプレスをかけてショートカウンターを狙い、北海道はハマりそうになればシンプルに前線の2トップに配給した。北海道が先制するも新潟が追いつきPK戦に持ち込んだ。

<東京 vs 神奈川>

東京 1 - 2 神奈川

神奈川が個で勝る部分が多くボールを保持する時間が長かった。東京は前線からのプレスのかけ方が非常に上手く、ショートカウンターでゴールに迫る場面が見られた。この試合を通して感じられたのは、ライン間でボールを受けることの重要性である。神奈川の選手は東京のライン間でボールを受け、前を向きチャンスが多く作っていた。相手の背後を全員が取ろうという意識を感じた。東京が先制するも、自力で神奈川が逆転し勝利を取めた。

<試合の全体の傾向>

チームごとに様々な特色がみられたが、共通して言えるのは、高い位置からプレスをかけるチームが多く、それを回避するために、シンプルにDFの背後にボールを入れることを選択するチームが多かった。また、DFの選手も背後の対応が雑な選手が多く、そこから多くのチャンスが生まれていた。試合時間が短いこともあり、失点のリスクを避けるために相手コートでプレーをしようという意図が感じられた。

<全体を通して感じられたこと>

この年代では、「背後の守備」「パススピード」をさらに強化していく必要性を感じた。また、ボールに対するアプローチ（ボールを奪う意識）はマストで身につけている必要があり、そのためファーストポジションを取り続ける必要性も感じた。

また、優勝した神奈川や、福岡のように、ハイプレスの中でもボールを大切にビルドアップしていくチームにはライン間で前を向ける選手が多かった。「どの場所に」「どのタイミングで」ポジションを取るのかということを理解し、行動に移せる選手の育成にも力を入れたい。良い場所にいるがタイミングが合わずに、良い場所ではなくなってしまうことがある。良い場所は一瞬しかなく、常に変化していくことを意識して指導していきたい。

さらに、決定力の重要性も大きく考えさせられた。ゴール前でシュートを（どんな体勢でも）ゴールに飛ばせるのか、しっかりとシュートまで持ち込むことができるのか、点を奪い合うスポーツである以上そこは追求し続けなければいけないと感じた。

最後に、今回国体視察をする機会を与えていただいたすべての方々に感謝を伝えたいと思います。今後、今回の視察を通して感じたことを、自分の指導に活かし、静岡県のサッカーの発展に貢献したいと考えています。今回は本当にありがとうございました。